

ベトナム環境事情調査団に参加して

(社) 日本環境衛生施設工業会 国際環境整備研究委員会 幹事
調査団 副団長兼実行委員長 赤澤 由起夫
(株神鋼環境ソリューション 環境プラント営業部 部長)

1. はじめに

国際環境整備研究委員会は、JEFMAの平成17年度事業計画で承認された海外調査事業として、平成17年3月7日から12日の6日間に亘り、ベトナム社会主義共和国ハノイ市を中心とした地域において、廃棄物処理及び下水道整備に関する環境事情の調査を目的として総勢10名を派遣した。

同委員会からの海外調査団は第6回目を数える事となるが、今回の訪問先の選定に当たっては急速に経済成長をとげつつあり、同時に環境問題の発生も懸念されるとともに、今後3Rの国際展開の中でも注目を浴びるであろうベトナムを選んだ。また、現地に今回の調査の主旨をご理解頂き、訪問先の選定などにご協力頂けるJICAから派遣されたエキスパートの方々がおられた事もベトナムを選定した大きな理由である。

視察に関する詳細な報告は、既に発行済の調査団報告書をご覧頂く事として、以下に視察状況の概要を紹介させて頂く。

2. 視察の概要紹介

調査団は、3月7日(火)の早朝に東京及び大阪から成田空港に集合し、結団式を行った後、

ベトナム航空955便にて定刻午前11時に成田を飛び立った。ベトナムハノイ空港までは空路6時間余りの旅であったが、エコノミークラスの座席も空席が目立ち、ゆったりとした旅のスタートであった。ハノイ空港への到着は定刻通りの午後3時10分。現地での入国手続き、通関もさしたる問題は無く、かつて社会主義体制の国に入国する際に感じた独特の緊張感も一切ないままにスムーズに入国を完了した。また、ベトナムの場合には日本との時差が1時間しかない事も欧米の視察の際に感じる体への負担も無く、更に旅を楽なものに感じさせる要因であった。現地到着後ロビーで現地人ガイドと合流し、手配済のマイクロバスに乗ってハノイ市内まで約1時間を、東南アジア的とはいいながら、南部の熱帯的な雰囲気とはまた違った景色を楽しみながら移動した。今回の視察に際しては、過去の経験から、短期間の視察中にホテルを移る事は手間がかかると共に、肝心の視察時間を削ることになるので、市内中心部のヒルトンホテルに連続して宿泊する事とした。ホテルにチェックイン手続きを済ませた後、初日の夜は今回の視察で種々のご支援を頂戴したJICAのエキスパートの前田先生、山本さん、二松さ

んと荏原の現地駐在員の岩田さんをお招きおして、市内の中華料理店での会食を行い、視察中のご協力をお願いすると同時に貴重な現地情報を多々頂戴した。会食は和やかな雰囲気のものとなり、初対面に近い団員同士の親睦の場としても極めて有意義なものであった。

明けて3月8日より視察を開始。当日は曇り空で気温は予想に反して20℃前後。若干湿度は高いものの、スーツを着込んでも暑くも無く、過ごし易い視察開始日となった。

10時にベトナム科学技術アカデミー(VAST)内の環境技術研究所(IET)を訪問した。IETはVASTの中でも最も新しく設立された研究所であり、この背景にはベトナム国内における環境問題に対する関心の高さがあげられる。当日はベトナムの『女性の日』に当たり、家庭では妻に、職場では女性従業員に花を贈る習慣があるという情報を入手したので、急遽研究所の女性達への挨拶代わりに花束を用意していたが、我々が到着した時がまさにセレモニーの真最中であり、突然総勢30名程度の女性研究員とアシスタント達の前で挨拶をさせられる羽目に陥り、若干驚きつつもいい経験をさせて頂いた。

研究所ではDong代表から懇切なご説明を頂戴し、ベトナムにおける環境問題としては、水質汚濁の問題が最も喫緊であり、次いで大気汚染、固形廃棄物処理であるとの印象を受けた。また、環境対策及び研究活動にも資金面での課題が大きい事を認識した。

同日の午後はベトナム天然資源環境省を訪問し、国際協力局のHa局長と面談し、ベトナムの環境行政に係わる組織の紹介と環境政策に関する説明を受けた。Ha局長はわが国の環境省の主導する3Rを担当されている由で、今後もまたいずれかの席でお会いする可能性のある方であった。



写真1 ベトナム天然資源環境省 Ha 局長
(中央女性) と調査団
(Ha 局長の左隣りに荏原団長、右に筆者)

翌3月9日は午前中にハノイ都市環境公社(URENCO)を訪問し、Hai 副社長にハノイ地域の固形廃棄物処理の実情に関する説明を受けた後に、URENCOの運営する、コンポスト製造工場、ゴミ収集車などの製造及びメンテを行う環境機械工場、そしてハノイ市街から2時間ほどの距離に位置する最終処分場の視察を行った。環境機械工場への道は中々の田舎道でバスの運転手がバラ畑へ迷ったりしたが、美しくのどかなベトナムの田園地帯を楽しむ事ができた。処分場への道のりは距離的にも遠かったが、昼飯時を挟んだ移動であったために、全員が腹ぺこ状態での長時間移動となり、肉体的にも辛い道りとなった。昼食は処分場でご用意頂いたが、大きな川魚の姿煮以外は大変おいしく頂く事ができた。内容も含めて充実した視察2日目となった。



写真2 ハノイ市内の信号待ちバイク群

3月10日は前日の廃棄物関係の視察と替わって、下水関連の視察を行った。まず、ハノイ下水排水公社を訪問し、Bao社長からハノイ市の下水道の現状及び将来の計画などの説明を受けた。その後、荏原製作所の建設した下水処理のパイロットプラントを視察を行った。

視察最終日となった3月11日は自由視察として、夕刻まで郊外の緑化事情を視察する組と、世界遺産に指定されたハロン湾の実情調査を視察する組の二手に分かれての行動となった。ハロン湾組が天気に恵まれなかった事を除けば、今回の視察を総括するにふさわしい有意義な一日となった。

夕方18時に市内のベトナム料理店に集合し、視察中にお世話になったJICAエキスパートの皆さんと、荏原の岩田さんを招いての夕食会を



写真3 小雨に煙るハロン湾



写真4 前田先生、山本氏、二松氏、岩田氏とハノイ市内エンペラーにて

盛大に催した後、ハノイ空港からベトナム航空954便にて定刻の深夜0時10分にベトナムを離れ、翌12日の早朝6時40分に成田に到着。全員の健康を確認した後に無事解散した。

3. おわりに

今回の調査団は丁度10名の小じんまりしたものであった。年齢的には60台から20台まで幅広く、また技術系6名、営業系4名という構成であった。実行委員長として企画立案を行っている際には、どのようにまとまっていくかが不安であったが、いざ視察が始まると各人の関心が程よく分散し、質疑の内容もバラエティーに富んだものとなった。その観点では非常にバランスのとれた視察団となり、成果を上げる事が出来たと考えている。

もう一つ渡航前に心配したのは鳥インフルエンザであったが、結果的に若干名の下痢の発症を除いて深刻な健康上の問題は発生せずに胸をなでおろした。東南アジア、インド、熱帯アフリカ、南米地域等への視察の場合は健康問題が大きな心配の種となる。今回大きな問題が生じなかった事は、団員各位の自己管理の賜物として、感謝申し上げたい。

文末とはなったが、今回の視察で大変お世話になったJICAエキスパートの前田先生、山本氏、二松氏及び荏原の岩田氏に改めてお礼を申し上げて、筆を置かせて頂きます。